教育長だより　No. 9

２０２１年6月２５日

探偵ナイトスクープより

～ 子どもは 子どもの言葉で納得し、学び合う ～

　みなさん、『探偵ナイトスクープ』というテレビ番組をご存じですか？　土曜日の夜遅い時間帯に４チャンネルで流れています。「しゃっくりはどうして止めるか？」など、視聴者からの一見バカバカしい問題に「探偵」（タレント）を派遣し、体を張ってその解決を目指すという番組です。ときどき「へえ～！」というようなテーマがあって、結構面白いです。
　一つ有名な話があります。書籍にもなりました。そのテーマは『アホとバカの境は日本のどこか？』というものでした。一般的に関西は「アホ」、関東は「バカ」ですが、その境界を知りたいという依頼の手紙でした。タレントさんがあちこちめぐって聞いていくうちに、一応滋賀と岐阜の県境：関ケ原付近とわかりました。しかし、名古屋を中心に「タワケ」という言葉が出てきて、番組は混乱。それがすごく面白かったということで、大学の先生を入れて書籍として出版されたのです。（私、図書館で借りて読みました。）
　さて、この探偵ナイトスクープの「４月の番組でおもしろいのがあった。」と、教育研究所の吉井先生から聞きました。そこで、パソコンで「ティーバー」か「パラビ」という後追い放送を見る機能を使って見てみました。以下に紹介します。

　「しんご（小６）と、りん（小２）の兄妹のお金のもめごとを解決してほしい。」というお父さんからの依頼でした。二人でお金を出し合って、3,600円（税込）のゲームソフトを１本買いました。兄が2,000円、妹が1,600円出すことで合意していました。
　そして、お父さんと３人で店に行ったのです。まず、妹のりんちゃんが1,600円を店のカウンターに置きました。続いて、兄は千円札を持っていなかったので、自分の財布から一万円札を出しました。
　すると、まず店の人はりんちゃんが出した千円札を兄に渡しました。そして、お釣りとして7,000円を兄に渡したのです。こうして念願のゲームソフトを買うことができて、２人はルンルンかとお父さんは思ったのですが、なぜかりんちゃんの顔が冴えないのです。
　気になったお父さんは帰宅後りんちゃんに聞きました。すると、りんちゃんは「お兄ちゃんが私の千円とった。」と怒っています。なぜかというと、妹からすれば「私が店の人に渡した千円札を、お兄ちゃんが自分の財布に入れた。」と見たのです。そこでお父さんは紙に「2,000＋1,600＝3,600　10,600－3,600＝7,000」と書いて、りんちゃんに説明するのですが、いっこうにわかってもらえません。紙にいろいろ書いて説明したのですが、りんちゃんは「納得できない。」と言います。そこで、この番組に解決を依頼したというものです。
　探偵のタレントさん（すいません。名前を忘れました。）は、お父さんと同じようにていねいに絵を描いて説明するのですが、妹のりんちゃんはわかりません。「実際に自分が渡した千円札がお兄ちゃんの財布に入っている。」と言い張ります。１時間以上かかっても、まだ解決しません。「お兄ちゃんが取った。」の一点張りです。助っ人に来たタレントさんも大弱りです。「このまま番組はどうなるのか？」と、テレビを見ている私たちも不安に・・。

そんな時、ふっと兄のしんごさんが「僕が説明してみる。」と、話し始めました。そして、「はじめ、ぼくが出す分は2,000円やったな。けど、りんちゃんの代わりに、もう1,000円、ぼくが店の人に払ったことになる。だから、ぼくは3,000円をお店の人に渡したことになる。それで、（お店の人からもらった）おつりは7,000円やったんや。」

この言葉で、やっとりんちゃんは納得したのです。

キーワードは「代わりに払った。」です。このお兄ちゃんの言葉ってすごいですね。「こんなとらえ方があるんや！！」と、タレントさんはもちろん、お父さんも感心していました。（もちろん、見ていた私もです。）こうして番組はシャンシャンで終わりました。

ここから私たち大人＝教職員が学ぶことがあります。それは「子どもの言葉ってすごい！」ということです。子どもどうしが同じ目線で説明すること。つまり、「学び合い」です。これって、すごい説得力を持っていると思います。

一方で、教室で先生が一生懸命「説明する」授業があります。子どもたちは「聞く」ばかりになります。大人の言葉での説明、つまり、講義形式の授業では、子どもたちの理解はなかなか進まないのではないかということです。子どもには子ども特有の言葉があり、それを「学び」に活用すると子どもたちの理解は早いと考えます。今、こんな授業が求められているのではないでしょうか。

それで思い出したことがあります。私が大阪の中学校勤務時代、先輩の英語の先生が、すごく学力がしんどい子の家庭訪問を繰り返していました。その子に翌日以降の授業の予習をされていたのです。もちろん、基礎の基礎ですが・・。その理由を先生に聞くと、「あの子がわかったらみんながわかるんやで。」と話されていました。今から４０年も前のことですが、授業の基本を言っておられたと思います。

ところで、こうした子どもの力に注目した「学び合い」の授業を提唱されていたのが、元東京大学の先生：佐藤学さん（今はイギリスの大学？）です。先生の授業は、中学校で４～５人の学習班をつくり、その中で「教え合う」のです。（先生は班をまわって見守り中心）

私、２０年ほど前にその研究授業を富士市（静岡県）の中学校へ見に行ったことがあります。班の中で生徒が教え合いをします。私たち教員からすれば、決してスムーズなせつめいではありません。しかし、相手の生徒は「あっ！そうか！」と、目の前で納得しました。生徒どうしの力のすごさにびっくりしました。確か、滋賀県内でも、彦根の高校で実践されていたと思います。前任の近江八幡市教委でも、「学び合い」の公開授業と佐藤先生の講演会の案内を見たことがあります。たくさん本も出ています。『学び合いの授業』として有名です。新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）に近いと思います。たくさん本も出されていますので、参考にしていただければと思います。

※ この『教育長だより』、この４月から野洲市役所のホームページに載せています。ホームページ内の市役所の「教育委員会」の中に、「教育長だより」の項目を新設しています。教育に関心のある保護者さんなどもご覧になっているのではと思います。

実は、もう1年以上前から、市教委がある市役所西別館の入口（教育総務課前）の掲示板に、「教育長だより」を掲示していました。すると、来庁される何人かが熱心に読まれていました。また、教育のことを市長さんなどに知っていただくことも大切だと思い、発行するたびに、市長さんや秘書広報課にも渡していました。（これは、私が教育長に就任してからずっとです。）

そんなことや秘書広報課のアドバイスもあって、ホームページに載せることになりました。いろんな方にご紹介くださるとありがたいです。